

職員リレーエッセイ

「色々な支援のかたち」

ニコニコハウス鶴里 生活支援員 西口あゆみ

私は昨年9月から月2回、「失語症向け意思疎通支援者養成講習会」を受講しています。

失語症の方が会話をする際に、相手にうまく伝えられるようにお手伝いをするボランティアを養成する講座です。

失語症というのは、脳卒中発作などで、大脳の言語の関係する中枢が損傷され「聞く」「話す」「読む」「書く」という言葉の機能が低下する症状です。言いたいことのイメージはできるが、言葉の引き出しが開かない…まったく言葉の通じない外国にいるような感じ、という症状で、国内に20万人から50万人いると推定されています。

知的機能や記憶などの能力は保たれているため、周囲に理解されにくく、働き盛りの年齢で発症する方が多いにも関わらず、社会とのつながりが絶たれ、孤立してしまうことが多いそうです。

講座では受講者が、失語症の人役・第三者役(窓口係や医師など失語症を理解していないという設定)・支援者役に分かれ、「役所で手続をする」「病院で受診をする」など様々な場面を想定して、ロールプレイングで支援を疑似体験していきます。

支援者役になった時は、言葉が出てこない失語症役の人から、言いたいことを引き出すために、質問を「はい・いいえ」の選択制にしたり、スマホの画面を示して「これでいい?」と確認したり、要約筆記をその場でして示すなどの工夫が必須です。

それでも相手の言いたいことがわからず、焦ることがあります。

逆に失語症者役になった時は、「言いたいことを相手に伝えたい!」という気持ちでいっぱいになります。なので、うまく伝わった時の喜びはひとしおです。

毎回講座の最後に、感想を発表しあうのですが、皆に共通していたのが、第三者に伝えたいことがある時、支援者がそばにいてくれるだけで安心できる自信がもてる、ということでした。

受講者同士はほとんどが初対面なのですが、そばについて、失語症役の人の意をなんとかして汲もうという気持ちが伝わるのでしょうか。

普段の生活でも、困っている人、悲しんでいる人に対して何も出来ず、悔しい思いをすることも多いですが、そばにいて相手を思う、ということも支援になるのだと感じました。

次のリレーエッセイは、緑区総務 中村明美さんに繋がります。